

山内清男の日本先史土器における縄紋研究 の草稿について

武井 則道

この山内清男日本先史土器の縄紋研究に関する草稿について書きたいきさつを書いておきたい。はじめにお断りしておきます。この文の中で出てこられる方がたは先学であったり、先輩であったり、同世代であったり。後進であったりします。本来はそれなりの敬称でのべなければなりません。ここではすべての敬称を省かせていただきました。お許しを乞う次第である。

塚田 光は1979年11月15日に山内清男の学位論文『日本先史土器の縄紋』を刊行して、販売をはじめた。その際、この本を研究者が理解し、活用するためには手引き、または参考になるものがあると考えた。そこで、塚田 光・渡辺兼庸・小山 勲・齊藤弘道・武井則道のメンバーで共同で研究する会を組織することにした。人選はすべて塚田自身がおこなった。渡辺兼庸は東洋文庫の図書部長の職にあり、国立国会図書館の書庫には自由に出入りできる立場であった。古い文献などの情報収集に期待していた。小山 勲は下総考古学研究会の一員であるとしてメンバーに入れたと塚田は語っていた。下総考古学研究会が進めたい勝坂式土器の研究のまとめ役をしていたがキレのよい成果を出せないことにいらだっていた。齊藤弘道はやはり下総考古学研究会の一員であるとしてメンバーに入れたという。彼は考古学関係の報告書を中心とする情報収集に力を入れていたことをしていた。また、山内家から提供された『日本先史土器図譜』関係の資料の整理と研究を塚田から依頼されていた。武井は山内の学位論文の出版の編集に協力するよう依頼されていた関係からである。

塚田はこの共同研究会で『日本先史土器の縄紋』の理解と研究から日本考古学界に普及をはかる目的とともに、二つの意図をもっておられた。一つはこの成果を海外へもひろめていくために英語に訳し、刊行することである。二つは先史考古学研究者としての山内清男の総合的研究をもくろんでおられた。

共同研究会は山内の学位論文刊行のあと、1980年1月・2月・3月とおこなわれた。場所は新しいビルとなった柏屋印刷所の3階であった。この「山内清男の縄紋研究に関する草稿」は1980年2月23日にひらかれた研究会で発表したものである。

この発表の基礎になった資料を筆者が預かることになったのはつぎのような事情による。この頃、筆者は横浜市埋蔵文化財調査委員会埋蔵文化財発掘調査団に在籍していた。そこで刊行していた『調査研究集録』第4冊の編集を担当していた。筆者も「遺跡群研究序説（前）」を執筆していた。さみだれ式に章・節ごとに書きあがると印刷所に届けていた。この中で山内清男の縄紋土器の型式学的研究についてかなりのスペースをとって書いていた。これをご覧になった塚田から1979年7月3日に山内清男の学位請求論文『日本先史土器の縄紋』の編集をおこなっているけど協力してくれないかと要請があった。承諾をすぐにした。それから1週間後に柏屋印刷所にうかがい、山内清男の日本先史土器の縄紋研究の資料を受け取った。資料は東京大学理学部2号館人類学教室の山内の研究室のキャビネットに入れられてあったと思われる状態そのまま

の山が二つあった。高さ約 50cm ほどであった。それぞれの山の上には「上」と書かれた紙が置かれていた。いつもショルダー・バッグに入れてある大風呂敷を 2 枚出して、それぞれを包んだのである。両手に持ち下げて、家に持ち帰った。

整理作業はつぎのようにおこなった。二つの山を A と B に分けた。A については A1、A2、A3、……と書き入れた。B についても同様な作業をした。これは、後で本来の積み重ねの順序を復元できるように考えたからである。つぎに、同じグループと思われる原稿をそれぞれ分類していった。その結果が「山内清男の縄紋研究に関する草稿」である。

なお、この山内清男の日本先史土器における縄紋研究の草稿の整理の時には、学位論文にかかわるものは含まれていなかったもので、十分検討をすることはできなかったことを述べていおく。これについては別稿「山内清男の『日本先史土器の縄紋』と塚田 光」で書いておいた。

〔元横浜市歴史博物館学芸員〕

山内清男の縄紋研究に関する草稿

1 縄紋の本態に就いて（豫報）

岡書院原稿用紙 20 字 10 行縦書き P1 ～ P31

（注） P31 の裏に多軸絡條体についてのメモあり。

2 斜行縄紋の本態

- ・ Nokichi Suzuki Anatomical Institute, Tohoku Imperial University, Sendai, Japan. という 21.9 cm × 28.0 cm の原稿箋にタテ書に記している。草稿と思われるもの現在 84 枚ある。

- ・ この草稿を書いた時期

「私は昨年本誌に『斜縄紋に関する二三の観察』と題して斜縄紋の種類と押捺方法について述べたことある」ということから 1930（昭和 5）年『史前学雑誌』第 2 卷第 3 號の翌年、即ち 1931（昭和 6）年である。しかも、「私は近頃陸奥中居貝塚の土器の縄紋に関して最後の観察に従事して居た」という。

- ・ 縄紋原体発見の経緯

「机上にあった縄を粘土上に回転しつつ押捺したところが偶然斜縄紋が出来上つたのである」。

3 学位論文で「Monograph として出版」しようと考えていたもので、「私は縄紋の原体とその回轉圧痕についての研究は昭和 8、9 年頃完成に近い状態になった。そして、草稿、図版を揃えて居た。」とみられる草稿。

- ・ MARUZEN IX という 20 字 20 行 横書きの科学用箋に書かれていて、大雑把にあって、1,000 枚はあるとみられる。

- ・ 下書き、清書が幾重かつ乱雑になっていて、これの整序が一番手間がかかるとみられる。

- ・ 図版の草稿の一部が下書き（Ⅰ）、（Ⅱ）、（Ⅲ）とみられる。

- ・ 図版草稿のかなりの部分はまた別にあると推察する。

4 Monograph と学位論文の間に位置づけられるそうこうがある。

a E. No. III MATUYA および SSD K という 20 × 20 の A4 判の原稿用紙にかかれたもの。40 枚ある。

第 2 章 縄紋原体（Ⅰ）

第 1 節 正の縄

第 2 節 反の縄

第 3 節 正反合の縄

第 4 節 縄の端

第 5 節 結 束

第 6 節 結 節

第 7 節 環（Loop）付きの縄

第 8 節 附加条

第 9 節 異 段

第10節 束

第11節 組 紐

第3章 縄紋の原体（Ⅱ）

第1節 単軸絡条第Ⅰ類

第2節 単軸絡条第ⅠA類

第3節 単軸絡条第Ⅱ類

第4節 単軸絡条第Ⅲ類

第5節 単軸絡条第Ⅳ類

第6節 単軸絡条第Ⅴ類

第7節 単軸絡条第Ⅵ類

第8節 単軸絡条第Ⅵ類の別種あるいは単軸絡条第Ⅶ類

第9節 多軸絡条

b コクヨ 20 × 20 の B5 判横書きの原稿用紙にかかれたもの。49 枚ある。

・全部ではない。この一部が学位論文の下書きに転用されていて、草稿が学位論文より古いことがわかる。

・第1章 序 論

第1節 縄紋の調査

第2節 縄紋研究の歴史 →この部分学位論文に転用

第3節 縄紋原体の発見

第2章と第3章は縄紋原体に関すると思われるが、項目は不明。

第4章

第3節 紋様と縄紋との関係

第4節 縄またはその他の側面を押すもの（原体側面の圧痕）

第5章 縄紋の歴史的発展

第1節 縄紋の起源

第2節 縄紋の系統的発展、退化に関する問題

第3節 器形、紋様の系統的発達

第4節 型式学の基礎

この a、b の草稿は、私は別個のものにとらえるが、補完関係にあるととれないことはない。草稿のいずれも山内清男の手になるものではなく、他人のものである。ただ、山内の加除筆は加えられている。このことから判断すると直筆の下書きの存在が推察される。

これらの草稿は、敗戦後縄紋原体の研究に関して、圧縮した形で呈示しようとしたもののひとつと推察できる。その意味では学位論文の理解に大いに役立つと思われる。

まお、b の草稿は、私が入手した成城大学での講義ノートと内容が一致するので、講義用原稿として使用されたと判断できる。このことから講義内容をかなり細かく復原できる手だてが得られる。

5 学位請求論文の下書き

1980. 2. 23 （武井）